

BOOK Review

自治体病院の歴史 ——住民医療の歩みとこれから

評者

佐藤元美 一関市国民健康保険藤沢病院



ご自身が自治体病院に勤務した経験があり、その後、長く自治体病院に関して研究を重ね、発言をしてこられた伊関友伸先生が本をまとめられた。大著である。710頁もある。明治期以来の自治体病院に関するおびただしい文献をもとに、歴史が述べられている。なかなか読破するのは大変だと心配したが、随所に自治体病院のその後を大きく変えるエピソードが活写され、また、著者の現在の視点から、その時々の方針について評価が記されていて読み物としての面白さがあり、最後まで一気に読み通してしまった。

自治体病院を動かしてきたものは、公的に残された記録からは運営する自治体の財政力と政治力である。それは今でも厳然としてそうだと思う。そのうえで著者の自治体病院への期待と批判が熱く述べられている。

第7章では「自治体病院と住民医療のこれから」と題して著者の意見が述べてある。自治体病院の存在意義を数値化できるものと数値化が難しいもの、存在意義があるものとならないもので4分割して論じている。存在意義がなく数値化が可能なものとして、7318億円の他会計繰入金、一時借入金に頼る経営、非効率な経営を挙げている。

存在意義がなく数値化が難しいものとして「お役所体質」のマネジメント、形式的な規則に縛られ、職員数や予算を弾力的に運用できない、職員が公務員の身分に安住する、医療に不勉強な議員が運営に干渉など手厳しい。

最後の部分に地域医療の「当事者」としての住民が項目としてあり、県立柏原病院の小児科を守る会や延岡市の県北の地域医療を守る会など住民が当事者として医療を守る運動を行っている例を紹介している。私は自治体、特に基礎自治体が運営する病院は住民にとって当事者意識を持ちやすい医療機関だと思う。医療は行政サービスや消費ではなく、住民と専門職が言葉と行為で織り上げていく物語のようなシステムだと私は考えている。患者としてだけでなく、当事者として住民が参加することで自治体病院はお役所体質を脱して、質がよく経営的にも良好な医療機関に変革することが可能だと信じているが、この本を読みその意を強くした。

自治体病院に勤務する医師やスタッフはもとより、自治体病院を運営する自治体の事務職、議員、首長にぜひ一読をお勧めしたい。私たちに対する叱責と励ましと何よりも愛情を感じる一冊です。

伊関 友伸 著

A5判/710頁/2014年/定価(本体価格3,800円+税)/ISBN 978-4-89590-481-0/三輪書店刊